
『朱色優陽 アケイロユウヒ 』2

想隆 泰氣

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『朱色優陽 アケイロユウヒ』 2

【Zコード】

N7102M

【作者名】

想隆 泰氣

【あらすじ】

緋蔭優との出会いを経て、境守起陽は夏休みを迎えていた。

よつやく訪れた長期休校。怠惰な日々を過ごすと画策する起陽。
しかし、そんな日論見も空しく、彼は休み初日から一本の電話で叩き起こされる。

横暴な電話の主に憤りつつも、求めに応じる彼。

向かう先は学校。その中庭。

そこで彼は、小さな花壇と 小さな少女に出会つ。

全校の嫌われ者であるはずの起陽に、ひまわりのよつたな笑顔を向ける少女。

果たして、少女の真意はどこにあるのか。
そして、その小さな花壇の意味は？

戸惑いつつも、起陽は小さな花壇と少女に興味を抱いて行く

『色移るふは花とヒト』

「一・一」

ガキの頃、夏休みの宿題で朝顔を育てたことがある。

真夏の暑い中、土いじりなんぞしたあげく、毎日ちまちまと水やりをするなんて、今となつては考えられないことではあるが、当時はそれなりに楽しんでいた覚えはある。鉢に立てた枠に蔓が伸びていく様は、見ているだけでわくわくしたもんだ。

とは言え、それもガキの頃の話だ。今さら園芸になど興味はないし、そんなことに割いている時間もない。

ようやく訪れた夏休み。一日中、冷房の効いた部屋でのんべんだらりと惰眠を貪りたいと言うのが人情というものだし、それこそが夏休みの有意義な過ごし方というものだ。

……そうだ。ようやくの夏休みだった。待ちに待った夏休みだった。しかも、その初日だった。くそ真面目に早くから起きる気は無かつたし、ギラギラと太陽の照りつけるこんな炎天下の真昼に、外出する気などわからぬかったのだ。

なのに、何故、俺はこんな場所にいるのか。

学校である。昨日までとは違い、人気のない校舎には静寂な空気が流れている。いつもは鬱陶しい教師達の姿も、今日は疎ら。当然だ。夏休みの学校にいる人間など、当番の教師か、クラブ活動に精を出す、青春真っ盛りな、それこそ炎の妖精の加護を得たような、暑つ苦しい連中くらいのもんだろう。

……忌々しい。そんな連中さえこの世に存在しなければ、俺がこんな場所に呼びつけられることも無かったと言うのに。

今日のお昼、時間ありますか？

そんな電話で叩き起された。ほんの数時間前のことだ。
電話の主は誰かって？　ひなたじや　ない。あいつだつたら、
そのまま受話器吊りつけて、今頃は夢の中だ。
つまり、そりゃできない相手だつたのだ。

では、正午に学校の中庭へ。良いですか？

柔らかく、丁寧ながら、有無を言わせぬ迫力をも含んだ物言い。
そして、俺が無碍にはできないような相手である。
この一つの条件に当てはまる人間なんて、一人しか存在しない。
香月センセーこと、香月 梗子かづこ史に他ならなかつた。

中庭の片隅に、園芸部が管理している花壇があります。

今日一日、園芸部員のお手伝いをお願いします。

あくまでも園芸部顧問としての『お願い』ですから、断つても構いませんけれどね？

まあ断るのなら、改めて朝日奈さんにお願いしますけれどね？

矢継ぎ早に紡がれる、耳障りの良い流暢な言葉。

それはとても丁寧で、どこまでも優しい響きだったので　断れる
わけが、なかつた。

情けないとは思つが、あのヒトとひなたに挾撃されたら、堪つたものではない。あの二人を前にすると、この世で最も恐ろしいものが、実は暴力などではないのだと言つことを思い知らされる。

……まったく、俺には女難の相でも出ているのだろうか。厄介な女ばかりに付きまとわれているような気がする。

……まあ、なんだ。一番厄介な女と知り合つてしまつたのが、ついこの間のことなのだが。

「…………」

この三人に組まれたら、それこそ堪らないな、何てことを思いながら、俺は嘆息した。

それにしても、いつたいいつになつたら、園芸部員とやらはやつてくるのか。指定の時間は過ぎてしているのだが、一向に誰かがやってくる気配がない。

眼の前には、一般的な家庭菜園程度の小さな花壇が、ひとつそりと在るだけだ。

……しかし、本当に小さい。園芸部で管理しているなんて言うから、もう少し立派なものかと思ったが、まるで個人所有のもののように、こぢんまりとしている。と言うか、煉瓦で枠を組んだだけのその佇まいは、みすぼらしくさえある。

でも、前に見た時も、こんな感じではあつたか。

「…………？」

ふいに湧いた感慨に、小首を傾げた。……俺は、何を考えていた？
だが、その時だ。

「待たせたなっ！ 境守さかがみつ！」

背後から、ふいに声をかけられた。

「！ つと、園芸部の奴か つて……あ？」
はつとして振り返るが、そこには誰の姿もない。

しかし、声は確かにすぐ背後から聞こえた。近くにいるはずなのだ。

「……どこだ？ 姿が見えん」

さよるさよると辺りを見回す俺。

と、

「ひへ、ひりひー。どこを見ているかっ、下だ、下つー。」

そんな声に従つて、ゆるりと視線を下らせれば

「……あんたが、園芸部員？」

問うと、そいつは残念な胸を得意げに張つて、

「うむつ、いかにもだつ

えつへん、と。

……。

ペットと飼い主は似る、何てことをよく言つが、花壇も世話をする人間に似るのだろうか。

炎天下の午後。

横暴な教師に呼び出されて来てみれば。

そこに待つていたのは、こぢんまりとした小さな花壇と

ツメクサの花のように、小ちくて、けれど凛とした強さを持った、一人の少女だった。

【つづく】

『色移ろふは花とヒト』

「 1 - 2 」

恐らくは、150センチあるかないかだと思われる。何せ、俺の視界に入らなかつたのだ。けして背が高い方ではない、ひなたや神山とて、そんなことはない。明らかに、平均を大きく下回る上背である。

おまけに、薄手の夏服ですらほとんど押し上げることのない、残念な胸元。これまた、けして恵まれているとは言えない前述の二人よりも、さらにしょんぼりである。

控えめに言つて、ちんちくりんの幼児体型だと言えよつ。正直にそう言つたら、眉間に手刀を叩き込まれたわけだが。

誰がマニア受けのツルペタ幼女かつ！

いやそんなことは言つていないので、なんて俺の言葉も聞かず、そいつは特徴的なハ重歯を覗かせながら、しつけの悪い犬っころみたに『がるるる』なんて唸つていた。

彼女の名は、大杉 逢花おおすぎ もよかと言つた。

信じられない話だが、その制服に付いたリボンの色を見るに、上級生だつた。小学生だと言わても疑わないのだが、年上なのである。嘘のようなホントの話だ。

ともかく、その逢花とやらが件の園芸部員であると言つ以上、俺はそいつを手伝つてやらねばならなかつたわけだが……さて。俺の助けなんぞ本当に必要だつたのかどうか、甚だ疑わしかつた。顔を合わせてからおよそ一小時間。俺のしたことと言えば、近くの水飲み場から散水用のホースを引っ張つてきたことくらいで、後の

はずつと少し離れた木陰で、花の世話をする麦わら帽姿の小さな少女を眺めていただけだ。

……今も、それは変わらない。俺は変わらず木陰でぼーっと逢花を眺め、逢花は額に汗しながら、せかせかと花の世話をしている。

外野からただ眺めるだけの俺と、花の世話に一人没頭する逢花。俺達の時間は、大きな隔たりの中にあって、けして交わることはない。

……俺とあいつの間には、実際の距離よりも広く、そして深い溝があるよう感じられた。

当然だ。あんなに一生懸命になつて花の世話をするような女が、俺なんかと関わって良いはずがないんだ。……俺は、境守起陽は、命を育むなんてスウコウな行いとは、対極に位置する存在なのだから。

う。

だが。

そろそろ、午後1時を30分は過ぎようかと言つ頃だ。

ふと何かを思い出したように立ち上がった逢花は、近くの陽影に置いてあつた手荷物の中から大きなレジヤーシートを取り出して、その上に何やら荷物を広げ始めた。

俺は怪訝な思いでそれを眺めていたが、間もなく彼女は満面の笑みで振り返つて、俺を手招きして見せた。

「? ……何だ?」

無意識に咳きを漏らしつつも、俺の足は彼女の元へ向かっていた。けして、何かを期待していたわけではなかつたのだが。

逢花の元に辿り着くと、眼の前には不思議な光景が広がつていた。

「……昼飯、か?」

思わず、間抜けな言葉が漏れた。

だが、逢花は特に何も思わなかつたのか、至極当然と頷いて、

「つむつ、お昼ご飯だ！ わたしのお手製だぞ、喜ぶが良いつ！」

そう言つて、口の端に八重歯を覗かせながら、子供のように屈託

なく笑つた。

眼の前には、小さくとも色取り取りの花が咲く花畠と、そしてそのすぐ側に、これまたファンシーな花柄が目立つランチセット。

何なんだ、このむず痒いような感覚は。

「……言葉遣いのわりに、少女趣味なんだな」

「んなつ……！？」

ぱつりと漏らした俺の呟きに、逢花は瞬間、顔を真っ赤にした。
「ちちちちちつ、違うぞつ！ こつ、これはあくまで母上の趣味であつてだなつ、本来ならわたし自身わ忌避すべきモノなのだつ！
なのだがつ！ 今日はちょっと致し方なくといつかだなつ！ 二人分のお弁当など詰めたことなどないわけでつ、当然ぴつたりのお弁当箱など持つているわけもなくつ！ 母上に相談したらこんなことに、だなつ……！」

上擦つた早口で捲し立てる言葉は、ほとんどよく分からなかつたが、

「あ？ 一人分？」

それだけが耳に残つた。

「一人つて……誰と誰よ？」

問うと、逢花は耳まで真つ赤にして叫んだ。

「…………ええいつ！ 皆まで言わせるな意地の悪い奴めつ！ ぐだぐだ言つとらんでとつとと座れつ！ 座らんかつ！」

剣幕に押されてレジャーシートに腰を下ろすと、逢花はようやく落ち着いて、言つた。

「……まったくつ……この状況で一人と言つたら、わたしとお前しかいないだろうが……」

つまり、眼の前のこれは、俺のために用意されたものだと言

うことだった。

……正直、自分の身に何が起きているのかよく分からない。

突然、横暴な女教師からの電話で叩き起^こされたかと思ったら、園芸部の手伝いをやらされることになった。と思ったら、大した作業もしていないのに、そこそこ手の込んだ手製弁当など、ご馳走になっている。

香月センセは、いつたい何がしたかったのか。何をさせたかったのか。

逢花は、何をさせたかったのか。……俺なんかと、何がしたかったのか。

……分からないことばかり。

結局、この日俺に分かったのは、小さな花壇に咲いた花々の美しさとそれを眺めながら頂く、逢花の手製弁当の匂^{にお}だけ。それだけだった。

【つづく】

『色移ろふは花ヒト』

〔 1 - 3 〕

果実の形を模した容器の氷菓子と言つのは実は色々あるらしく、以前、何気なく立ち寄ったコンビニでオレンジシャーベットを見つけた。

別に高いモノでもないし、軽い気持ちで買って行つたら、あのヒトは大層喜んだ。それはもう、見ているにしつちが恥ずかしくなるぐらいのはしゃぎようだった。

それからと言うもの、いつの間にか、商店のアイスケースを見かける度に、何かないかと探してみるのが日課になっていた。あのヒトが喜びやうなものを手土産にするのが、日課になっていた。

で、園芸部の手伝いといつ名の昼食会を済ませた後、今日も今日とて、冷たい手土産を携えて、俺はそのヒト 優さん^{ゆう}の病室へとやつてきたわけだが。

「……一つ聞いてもいいか？」

「んー？ なーにー？」

いつもの脳天氣声で答える優さん。

俺は一つ嘆息してから、問うた。

「何で、このヒトがここにいる？」

俺の指差す先には、パイプ椅子に腰掛ける、見舞客らしき美女が一人。

……俺は、そのヒトをよく知っているわけだが。

「こり、そう不躾にヒトを指差すものではないですよ、境守君？」

そう言つて、珍しくいたずらっ子のような笑みを覗かせるそのヒト。

その笑みが何だか腹立たしくて、俺は殊更指を突きつけて、言つた。

てやつた。

「つ……んじゃあ直接聞くぞ！ 何だつてあんたが、こんなこといんだつ 香月センセよつー？」

優さんの傍らで微笑むそのヒトは、香月梗子女史に他ならなかつた。

「なんでつて、お友達だからだよ？」

答えたのは、優さんだつた。

「はあ！？ 聞いてねえぞ、んな！」と一

「うん。言つてないもん」

激昂する俺に、ちりつと言つてのける優さん。

「何でよ！？」

俺のガツコが香月センセの勤め先だなんてのは、俺やひなたの制服を見れば一目瞭然のはず。気づいていれば、一言在つてしまふべきではないか。

つまり、気づいていて言わなかつたのか？

「え？ だつて」

しつれつとして、優さんは言つた。

「その方が、面白いじゃない」

.....。

.....ちよつと、その、すいません。少し、壁とお友達にならせて

下さー。

「はいセリー、壁とお友達になつてないで、ヒトと話す時はちりんとこいつち向きなさい。香月せんせーにそう教わつてないのー？」

背を向けて、壁に頭を預ける俺に、原因を作つた当人は無慈悲な言葉を浴びせてくる。

香月センセはセンセで、

「まあ、そのレベルの教育は初等教育ですからね。私の担当ではありますんけど」

なんて、のほほんと笑っているし。

何だか頭痛がしてきたが、このままこいつしても話が進まないのは事実だった。

意を決して振り返ると、並んでこいつを見る一人の美女が眼に映る。

普通の男であつたなら、すわ美の女神の共演かと思わせかねない取り合わせだが、俺にとつては地獄の女帝の狂宴である。

「……あんたらそーやつて、当人の『り知らぬところで俺を笑い物にしてやがったのか』

恨めしそうに言つてやると、さすがの優さんも少しだけ焦つたような声を上げた。

「ええっ？ 笑い物になんかしてないよお、たつくんが如何に良い子か、如何に可愛い子かつて話しかしてないもんっ」

「もつと嫌だわぼけえつ！」

「え～ん、たつくんが怒鳴つたあ～」

なんて、思わず怒声を上げた俺に、優さんは見え透いた泣き真似などしつつ、傍らの香月センセに身を寄せる。

「はいはい、大丈夫だから泣かないの、ゆうちゃんは強い子でしょ」と、幼い子供をあやすように優さんの頭を撫でてやるセンセ。

……そんな一人を見ていると、まあ確かに、いい友達なんだろうなあ、なんて思う。

まあ、取り敢えず。二人のことはこれからゆづくり聞かせて貰うとして、だ。

……聞くまでもなく、一つ、無視できない現実が確定してしまつたわけだ。

優さん、香月センセ そして、ひなた。囁らずも今日、この死のトライアングルが形成されてしまった むしろ、俺の知らないところではとつくに完成していたのだ、境守起陽包囲網が。

……この先のことを考えるだけで、頭が痛くなつてくる。

だから嫌だつたんだ。しがらみ背負つて生きるつてのは。

【ハリハ】

『色移りふは花ヒヒ』

「 1 - 4 」

世の中には信じられないことと云つのが往々にしてあるもので、例えば、小学生みたいな体躯をした女が実は年上であつたりとか。しかし、彼女に聞かされた昔話は、それよりも余程空想めいた話だつたので、

「 ……やっぱ嘘だろ? 」

そんな疑問が、いつまで経つても俺の中から消えることはなかつた。

「 嘘じやありませんよ 」

困つたように、彼女

香月センセは苦笑した。

「いやでもよ、俄には信じがたいぜ、あんたと優さんが、学生時代ライバルだつた……なんて、さ」

優さんの病室で、一頻り昔話を聞かされた後、朱色の夕陽が照らす帰り道。俺と香月センセは肩を並べて歩いていた。思い返されるのは、先ほどまで聞いていた昔話だ。

香月センセと優さんが知り合つたのは、丁度俺らくらいの年の頃。香月センセは今に輪をかけた堅物で、一方の優さんは、今と変わらずとぼけた笑顔を皆さんに振りまいて、いつも皆の笑顔の中心に居るようなヒトだつた。

勉強しか能の無かつた香月センセは、どちらかといつと集団から孤立しがちな女生徒だつたが、優さんはその気安さと言つ名の図々しさで、瞬く間に香月センセを自分のテリトリー　『緋蔭優時空』に取り込んでしまつた。

それからと言つもの、一人はいつしか親友と呼べる関係になつていつたわけだが、そこまではいい。そこまでなら、別に疑うべき

要素はなかつた。

信じられなかつたのは、あの優さんが、あのとぼけた女が、この香月梗子女史がライバル視するほどの才女であった、と言つ事實。……いや、事実だとは到底思えないのだが。

「言つちや何だが、俺、あのヒトに知的な部分なんて感じたこと無いぜ？」

「酷い言いようですね」

苦笑しながら、センセは言つ。

「彼女が才媛であったのは間違ひありませんよ。だって、私、文系以外の教科であの子に勝つことなんてないですし、総合ではいつも負けていました。それに、地味な一生徒でしかなかつた私と違つて、彼女は生徒会長なんて言つ肩書きまで持つていましたからね」

「……まあ、人望はありそただけだな」

それだけは分かる気がする。実際、病院でも彼女は人気者だし
俺自身、惹かれているのは否めない。

複雑そうに眉を寄せる俺が愉快だったのか、センセはふと、くすりと笑つた。

「やっぱり敵いませんね、あの子には。私のできなかつたことを、こんなにもあつさりとしてしまうのだから」

言つて、眼鏡の奥の瞳を少しだけ寂しそうに揺らした。

「？ どう言う意味？」

問うと、センセは改めるように優しく微笑んで、続けた。

「昔……私や優と同じ学校に、一人の男の子がいました。学校中から不良のレッテルを貼られて、でも他の悪い子達とも連むことなく、いつも孤立していた男の子。

私は彼に何かしてあげたくて……助けてあげたくて。でも、何もできなくて。

……結局彼は、私の手の届かないところに行つてしまつた。

境守君を見ていると、彼のことを思い出します。よく、似ています。外見とかではなくて、ヤマアラシみたいなところ、とか。だから、ついついキミに肩入れしてしまいます。世話を焼きたくなってしまいます。笑わせてあげたいと……優しい顔をさせてあげたいと、思ってしまいます……教育者、失格ですけどね、こんな私情を挟んでは

言つて、センセは自嘲的に笑う。

「いや……そんなこた、ねえと思つたば……わ」

条件反射的に答えつつも、その実、俺は上の空だった。そんなことよりも、余程気になつたことがあつたから。

「……優には敵わないです、ほんと」

そう言つて、寂しげに笑うセンセ。

俺は僅かに黙してから、尋ねた。

「……そいつのこと、好きだつたの？」

我ながら、どうでもいいことを聞いたものだと思う。色恋沙汰なんて、俺に似合わないこと甚だしい。それでも、尋ねずにはいられなかつたわけだが。

センセは何も答えなかつたが、夕陽に照らされた朱い顔が、一瞬、恋する少女のようにあどけなくはにかんだような気がした。

「……昔のことですから。……それでも、やっぱり肩入れしてしまいますけど」

しばらくして漏れたその咳きは、今までの話の続きのようであつて、その実違うような気もした。僅かに潤んだ彼女の瞳に映るのが、俺ではないような気がした。

それはただの猜疑心だったのか、或いは、子供染みた嫉妬だったのか。

何にしろ、俺にはそれ以上、彼女にかける言葉が見つかなかつた。

俺達は言葉もなく、肩を並べて歩く。堅物の女教師とひねくれ者の不良学生。変な組み合せ。……だけど、居心地は不思議と悪くない。

そう言えば と、一つ聞かなければならなかつたことを強いて出したが、しかし、俺は言葉を飲み込んだ。

俺達を空から照らす朱い夕陽も、今は黙つていろ、と。……そつ、言つてこぬよつた気がしたから。

【つづく】

『色いろふは花とヒト』

「2・1」

大杉逢花の実家は、『ガーデンショップ大杉』と言う屋号を掲げる商店だった。とどのつまりが、園芸用品一般を扱う花屋である。家族経営の小さな店だったが、店構えはそれなりに手の込んだもので、女の子好きのしそうな綺麗で可愛らしい作りの店だった。その店先で、俺は一人の可愛らしい女性と向かい合っていた。ふわふわの髪に、フリルの付いたピンクのエプロン。少々、少女趣味が過ぎる嫌いはあるが、その華奢な体躯と柔軟な表情、穏やかな物腰は、その女性らしい可愛らしさに良く似合っていた。

「……お姉さん？」

条件反射的に漏れたそんな咳きに、当の本人は、

「あら」

なんて嬉しそうな声を上げたが、

「……いや、認め難いのだがな これでも、母上なのだ」

そう言って、その可愛らしい女性の娘 大杉逢花は、軽く頭を抱えた。

さて。何故俺達がこんな状況に陥っているのかと言えば。
話は、三十分ほど前に遡る。

前日、結局ことの真意を香月センセに聞き出せなかつた俺は、もやもやとしたものを抱えたまま翌日 つまり、今日の朝を迎えた。別にそこまでする意味も義理もないし、無視してしまつても良かつたのだが。……気がついたら、昨日と同じように、学校へと足を向けていた。

だが、校門に差し掛かったところで、俺は帰途につく逢花と鉢合させた。聞けば、今日は初めから、花壇の世話は午前中に済ませ、

昼食は家で取る予定だったのだそうだ。

それならそれで解散すれば良かったのだが。どうこうつむりか、俺は強引な逢花に手を引かれ……そして、現在に至る。

で、だ。

「……マジでか

眉をひそめて、確認するよひに問うた。

逢花は嘆息して、

「マジなのだ。……いい年をして何を考えているのかと、いつも問うていてるのだがな」

確かに、その意見も一理ある。俺達くらいの子が在れば、その実年齢は推し量るべくもない。ピンクのフリフリは幾ら何でもないだろひ。

しかし、実際、この母親は実年齢を感じさせない。俺が開口一番で呴いた言葉はお世辞でも何でもなくて、極当たり前に、そう思つたが故。そうとしか思えなかつたし、今だつて、母親であると言つ方が疑わしいくらいなのだ。

率直に言つて、非常に可愛らしい。そして、魅力的なヒトだ。

逢花に、よく似ている。

「はじめまして、逢花の母です。逢花ちゃんがいつもお世話になつてます～」

間延びした声でねつ言つて、逢花の母は深々とお辞儀をする。

「え？ あ、いや、世話も何も知り合つたばかりで……」

ふいなことに、ろくな返答が思い浮かばない。

「あら～、そうなんですか～？ 逢花ちゃんたらすごく嬉しぃうござつてきたから～、てつきり～、色々～、お世話になつているものだとばかり～」

「い、色々？ お世話？」

「なつ、何を言つてこむのだ母上つ～！」

妙な含みのある物言いに問いか返すと、逢花は慌てたよつて俺達の間に割つて入つた。

「妙なことを言わないでくれ母上！ 境守にはもう歴とした恋人がいるのだつ！ だから、私と境守は、母上が想像しているような関係では断じてないのだぞつ！ 境守もつ、母上の言つことに一々反応しないで宜しいつ！」

「お、おう」

ハイテンションで捲し立てる逢花に、そんな言葉しか返せない俺。

だが、慣れているのか、はたまた単にずれてこいるのか、逢花母は違つた。

「あら～、そ～なの～？ それは残念ね～、息子ができるのかと思つたのに～」

なんて。

「母上つ！」

真つ赤な顔で怒号を上げる逢花だったが、それでも逢花母は柔軟に笑つてゐるだけだつた。

逢花も、そんな母に慣れているのか、それ以上躊躇つづくことはせず、

「つ 行くぞつ、境守！ こんなヒトの粗手はしていられんつ！」

そう言つて、俺の手を引いた。

手を引かれるままに、店の奥に通される俺。背後では、「ゆつくりしていってね～」なんて言つ、逢花母の愉快そうな声がしていた。

店の最奥には扉が一つあって、どうやらそこから、白毛くと抜けられるよつになつてゐるらしかつた。

だが、

「お、おい 逢花つ！」

さすがにこれ以上流される訳にも行かず、俺は前を行く逢花を引き留めた。

「どう言つもつだよ、わざわざめーの家まで、俺なんか連れて
きて」

「？ どう言つも何もないだろ？ 今日まで来てくれるとは思わ
なかつたとは言え、弁当を用意していなかつたのは私の落ち度だ。
なれば、この上はできたての料理を振る舞わねばなるまい。それが
道理と言つものだ」

「どう言つ道理だ！？」

せりじと訳の分からぬことを言つ逢花に、思わず語気が荒くな
る。

だが、別に怒つてこる訳ではない。ただ 不可解なのだ。

俺は一度氣を落ち着けて、改めた。

「……あらよ。正直、よく分からねえんだよ。いきなり香月センセ
に呼び出されたかと思つたら、弁当持つたまつこいのが現れてさ。
その上、今度はできたての手料理？」 意味が分かんねえ。

お前、俺のこと知らない訳じゃないんだろ？ 俺は境守起陽だぞ
？ 全校の嫌われモンだ。お前、俺が嫌いじゃないのかよ？ 普通、
俺なんかと一緒にいたいわけないだろ。お前 いつたい、何がし
たいんだよ？」

不信感を隠す気もなく吐き捨てる

「 お前のこと嫌だなどと、そんなことあるものか」

まるで真夏のひまわりのよう、凛とした姿で逢花は言った。

「私は、お前を嫌だと思ったことなどこれまで一度もないし、一緒
にいたくないとと思ったことなどない。むしろ、その逆だ。私は、お
前と一緒にいたいと思っている 想つていた。だから、今、私は、
お前は、ここにいるのだ」

「

返す言葉が見つからない。何を言われたのかすら分からない。

ただ一つ、言えるのは。

「……じゃあ、いいのか

そんな咳きに、逢花はこくりと頷いた。

「勿論だ。私が腕によりをかけて作る馳走、遠慮無く愉しむが良い

！」

言つて、出会つた時と同じように、残念な胸を自信満々に張つて
みせる逢花。

……正直、混乱はしていた。未だ彼女の真意は計り兼ねていたし、
疑問は残る。

けれど、取り敢えず今は、小さな先輩の厚意に甘えさせて貰うことにしよう。ぐづ、と鳴った腹の虫が、彼女の手料理をせがんでいたから。

【へび】

『色移りふは花ヒト』

「2・2」

表では、まだまだ眩しい暁下がりの太陽が燐々と降り注いでいる。耳に届くのは、微かな町の喧噪と蝉の声。

真暁の商店街はそれなりに賑わつてはいたが、それでも常時ほどの慌ただしさはなく、ヒトにも町にも、極穏やかな時間が流れている気がした。

平和な夏休みである。学生にとっては、有意義に過ごすべき貴重な時間だ。

……その貴重な時間に、俺は花屋の店先で似合わないエプロンなど身に着けて突っ立つている。

俺はいつ、花屋でバイトなどすることにしたのでせうか？

すぐ側には、同じようにエプロンを身に付けた逢花。他には誰もいなかつた。

本来の店の人間の内、逢花の父は、元より苗の買い付けとかで出かけていたし、あの母親はと言えば、急な配達だとかで、つい先頃、大慌てで店を出て行つた。

……つまりは、それが原因なわけだが。

要するに、店番を押しつけられたわけである。……何で俺が？

だが、その疑問に答えてくれる者などここにはいない。俺の相方として今現在そこにいる幼児体型こそが、その魔の提案に一番乗り気であつたからだ。残念なことに。その胸と同じくらいい、残念なことに。

だがまあ、あのフリフリのピンクエプロンを着けさせられなかつただけましか。俺の首には、本来は逢花父の物であるジーンズ生地

のエプロンが掛かっている。

一方、少女趣味全開の方はと言えばまあ、言わずもがな、眼の前の方ちまつこいのが着けているわけだが。

「ええいっ！じろじろ見るなっ！仕事がし辛いだろうがつ！」

と、商品の手入れをしていた逢花がふいに怒号を上げた。

じろじろ見ているつもりはなかつたのだが、逢花にはそう感じられたらしいいや、まあ、なるほど。そう言つことか。

「何だ、気にしてるのか、そのピンクのフリフリ」

「当たり前だつ！」

言つて、逢花は恥ずかしそうに顔を赤くした。

「前にも言つただろ？、こんなのは私の趣味ではないのだつ。こんなつ、中世で脳がトチ狂つたようなデザイン、誰が好き好んで着るものか？……誰が見たつておかしいではないか？、こんなものつ……」

どうして良いのか分からぬくらい恥ずかしいのか、逢花は深く俯いて、エプロンの裾をきつく握りしめる。

俺は、そんな逢花を少し黙つて眺めてみた。

果たしてそれは、そんなに言つほどおかしいだらうか？

逢花はけして、こういつた服を着て氣味が悪いような顔立ちはしていないし、小さくて華奢な体躯も、どちらかと言つとそれに似合つてゐる。全く癖のない長く伸ばした緑髪は、一見和装の方が似合いそうではあるが、いやしかし、これはこれで趣がある。

「そこらの変態野郎に襲われてもおかしくないと思つが」

「フォローしているつもりかそれは？」

いかん。無意識に思つたことが漏れていた。逢花の瞳が恨めしそうに潤んでいる。

「ううう……こんなことなら、店番など一人ですれば良かつたつ……」

…

涙混じりに、そんなことを漏らす逢花。

そりやちょっと勝手過ぎやしませんかってことはあるが、まあ、取り敢えずはそんなこと、どうでもいい。

俺は嘆息して、続けた。

「……まあ、確かに。常口頃からそればっかってのは何だナビ、似合ひ似合わないで言えば、逢花には、良べ似合ひてると思つが似合ひ？」

？」

言つと、逢花は恐る恐る、顔を上げた。

「本当……か……？」

まるで、か弱い少女のよくな声。……いや、実際少女ではあるんだが。

「ああ、嘘やお世辞は得意じやねえよ、俺あ

首を竦めて言つてやると、逢花はふにに眼を輝かせて、俺を正面から見上げてきた。

「じゃつ、じゃあつ、かつ 可愛いかつ！？」

「つ ……？」

その質問もさる」とながら、何かを期待する子供のよくな、爛々と輝く大きな瞳に気圧されて、俺は瞬間押し黙つた。

だが、

「なあつ、可愛いかつ！？」

そう執拗に求めてくる童女に、間もなく折れた。

「つ ……あ、ああ……か 可愛い……と、思つ、ぞ……」

それを聞くや、逢花はさらに眼をきらきらと輝かせ、

「な、なら、少し眼を瞑つてくれないか！？」 いやすぐ済む。少しでいいんだつ

「」

落ち着き無く訴える逢花に、答えるより先に眼を閉じた。

少しして、逢花の合図で眼を開けると、そこには、少し意外な彼女の姿があった。

「ど、どうだらうか……？　これでも……変ではないか……？」

少しだけ怯えるように、そう尋ねる彼女。その髪に、おしゃれと呼ぶには余りにさせやかな、細いリボンが一つ、結んであった。

何が変だと叫ぶのだろう。そのくらいのことでは、何を怯える必要があるのだろうか。分からなかつたが、その愛らしいリボンが良く似合つているのだけは間違いなかつた。

その姿があまりに、何と言つか……可憐で。正直、照れ臭くはあつたのだが、

「……ああ。良く似合つてゐる。……可愛い、と思ひせざ。」

少しだけ戯けるようにして、微笑ひました。

俺の言葉に逢花は嬉しそうに笑つたが、ふと恥ずかしそうに俯くと、ぽつりと言つた。

「……恥ずかしついでに、聞いて貰えるか……？」

「……今更、否も応もないだろ」

苦笑混じりに言つてやると、安心したように微笑んで、逢花は言った。

「私にはな、夢があるんだ。……馬鹿げた夢だ。お前は、笑うかも知れない」

「……気にすんな。聞いてやるから」

促すと、こくりと頷いて逢花は続けた。

「私は、この世を花で一杯にしたいんだ。綺麗で、可愛くて、優しい花たちを見て、触れて……そうすることで、首を元氣にしてやりたい、笑顔にしてやりたい……そう、思つてゐるのだ。……呆れたか？」

遠慮がちに問う逢花に、俺は首を振つた。不思議と、笑う要素も呆れる要素も見つからなかつたから。

「……境守には、夢はあるか？」
「ふと。」

……そんなこと、考えるのも馬鹿馬鹿しい。俺みたいにならうでないが、一端にヒトの夢なんて語れるわけがない。そんなこと、許されるわけもない。

だから。

「馬鹿な奴の馬鹿な夢を叶えてやる」と……へりいか
今はそう、嘘いた。

……そつすことしか、できなかつた。

【つづく】

『色移りふは花ヒヤ』

〔 2 - 3 〕

「 もで、起陽くんや。それじゃ一つ、聞かせて貰うとしましょ
うか」

と、俺の傍に正座して、こちらの顔を覗き込むよつしゅるヒア
ロン姿の女。

ヒアロン姿と言つても、このちの女はあつちほど、残念な体躯を
しているわけではないが。

「 ……どうしても聞きたいのか？」ひなたさんや

嘆息しつつも、調子を合わせて俺は返す。長い付き合の間に、
もうすっかり慣れてしまつたやりとりである。不本意ではあるが。
するとその女 朝田奈ひなたは、にっこりと無慈悲な笑みを浮
かべて言つた。

「ええ、もちろん。だつて、起陽が夏休みのお昼前に家にいな
んて、絶対おかしいもん。起陽が自発的に早起きするなんて、絶対
おかしいもん。あたしが起こしに行く前にもつ起きてるどこらか、
家にいななんて 絶対、認められないんだから」

……アナタそれ、凄く理不尽なこと言つてますヨ？

そう言つてやりたいところだったが、言つても聞くわけないのは
分かつっていた。

「 ……分かつたよ、何が聞きてーんだ」

嘆息混じりに言つと、ひなたは満足したよつに頷いて、言つた。

「 昨日今日との二日、昼間から外でどんなおイタをしてきたのか
しり? 怒らないから、おかーさんに話して『覧なさい』」

……誰が『おかーさん』か。こんなのが母親だったら俺はグレる
ぞ。……いやまあ、もうグレてるけども。ヘンゼルも真つ青なくら

いグレー テルけどもね。

閑話休題。

さて。しかし、どう答えたものかな。ただ事実をありのままに語つても面白くない。何より、何だか負けたような気がして腹立たしい。

しばし思案して、俺は答えた。

「……フリフリの衣装の似合ひ可愛い女の子と、綺麗な花畠を眺めつつランチなど」

「なつ なんだつてえええええええつ！？」

よほど予想外だったのか、ひなたは壁際まで後退つてそう声を上げた。おい、誰かキバヤシ呼んで来い。

「そ、それって、まるっきり『ティー』じゃないの？！」

「……そなうのか？ 無自覚だったが。てか、言われてもびんと来ないが。

「しかもなに！？ フリフリの衣装の似合ひ可愛い女の子！？ フリフリの衣装！？ フリフリって！ それはあれ！？ 「ゴスロリってやつですかつ！？」

いや、「ゴスロリではなかつたが。逢花の話では、ピンクハウスとか言つらしきぞ、あれば。……てか、「ゴスロリってお前。

「起陽つてば、口りつぽいのが好みだったのね。……幼馴染み歴十五年目にして一番の衝撃だわ……」

いやいやいや、待て。それはない。どっちかつて言つと、ちっちやいより大きい方が俺は好きだ。どこが、とは言わないが。まあ言うなれば、優さんや香月センセみたいな以下略。

「 でも、今日のあたしには秘密兵器があるのよ……ふつふつふと。ひなたはふいに不気味な笑いを漏らすと、何やら俺に背を向けて、傍らにあつた自らの鞄の中を『ごそごそ』とまじぐりだした。口を挟まず眺めていると、やがてひなたは、

「じゃーんっ！」

なんて言いながら、振り返った。

「どーだっ！」

……どーだと言われてもな。

「何だそれは」

問うと、ひなたは何故か自信満々に胸を張つて言った。

「ねこみみですっ！」

……。

確かに、アナタの頭の上に鎮座したそれは猫耳でしじうけじむ。

「…………どしたの、それ」

「今日、やよいちゃんとお出かけして買つてきたのです！ えっへん

だから、何故得意げなのですか。

…………と言つたが、その友人の名はひなたから聞いて知つている。確かに、ある特殊な趣味の持ち主だ。そいつと一緒に出かけて、で、そのアイテムですか。

「…………何となく、どこに行つてたのか分かつたわ」

「秋葉原です！」

「言わんでいいわっ！」

…………まったく。あの街にも困つたもんだ。次から次へと訳の分からん、いかがわしいもん生み出しあがつて。……まあ、猫耳なんて可愛いもんだけど。

嘆息して見やると、ひなたは何かを期待するように「ん？ ん？」

なんて小首を傾げたりしている。

「…………言つとくが、何も言わんぞ

冷たく吐き捨ててやると、

「むう～っ！」

なんて、ひなたは如何にも不満そうな声を上げて、

「起陽のばかっ！ いつなつたら、起陽のことも可愛くしてやるんだからっ！」

「いや、鞄から猫耳をもう一つ取り出した。

……それをどうするのかなんて、考えなくたって分かる。抵抗したって無駄だつてことむ。と云つか、抵抗する気も起きないのだが。めんどくさくて。

「よしー ほーら、可愛くなつたつ！」

どうだと言わんばかりの表情で、ひなたは言い放つ。

俺の頭上には、ひなたとは色違の猫耳。

……まあ、取り敢えずは満足してくれたらしく。

嘆息しつつ猫耳をむしり取ると、俺は改めた。

「ガツコの中庭にさ……小さい花壇があつてよ。香月センセに呼び出されてさ。園芸部員の奴と、その花壇の世話をさせられてた」
若干嘘ではあつたが、ひなたに疑う様子はなかつた。

「ああ、あそこー。あの花壇、小さいけど、凄く綺麗なんだよね。花の種類も結構多くて、ラベンダーとかのハーブ系もあつたりして。園芸部のヒトが世話してたんだ、へえー」

「何だ、案外有名なのか？」

すぐに思い当たつた様子に、少しだけ驚いた。よほど良く氣の付く奴でなければ、あんな中庭の片隅にある小さな花壇、知らないでも不思議ではないのだが。

「有名かどうかは知らないけど、あたしは、いつもどんなヒトが育てるのかなーって、ちょっと気になつてたから」
なるほど。単にこいつが目敏い女だったつてだけの話か。

「でも、残念だよね」

「ふいに、ひなたは言った。

「あの花壇も、もう見られなくなっちゃうなんて」

「どう言つ意味だ」

ひなたの不穏な物言いに、少しだけ、声が低くなっていたかも知れない。

驚いたように眼を丸くして、ひなたは言った。

「えつ？ だつて、中庭のあの辺り、野球部が春の大会で優勝した記念碑を建てるから、もつ今月の終わりには整地しちやうつて……知らなかつたの？」

それはまるで、たちの悪い冗談のような話だった。

【へい】

『色移りふは花とヒ』

〔2・4〕

別に、さほど肩入れしているつもりはなかつたんだ。
元々、横暴な教師に無理矢理呼び出されてのことだ。花壇にも、
園芸部にも、何の思い入れもなかつた。

逢花にだつて。

出会つていなれば、何も知らなければ、俺は今頃香氣に惰眠を貪つて、望み通りの日々を送つていただろう。

……だけど、もうダメだ。だつて俺は知つてしまつた。小さくとも、美しい花壇の存在を。出会つてしまつた。小さくとも、何より美しい花を。

肩入れなどしていない、と。……そう嘯いたところで、俺は今、こんなところにいる。

「境守？」

少し驚いたような声が、背後から聞こえた。

俺はささやかな花壇を眺めるのを止めて、振り返る。

そこには、予想通りの少女の姿。

「……よう、逢花。遅かったな」

言つてやると、逢花は慌てたようにぱたぱたと駆け寄つて来て、一寸の間にすっかり慣れてしまつた距離で、俺の顔を見上げた。

「何が遅いものか！　まだ八時前だぞ！　授業もないのに、お前が来る時間ではないだろ」とゆーか、まさか今日も来てくれるなんて思わなかつた。だからこそ、気まぐれでこんな早い時間に来たと言つのに……。もし私が遅く来ていたら、それまで待つつもりだったのか？」「

「ああ。……どうせ暇だからな」

すでに一時間待っていたとは言えなかつた。

逢花は、どこか複雑そうに苦笑して、

「……呆れた奴だ。そんな熱心に通い詰めても、良いことなど何もないぞ。精々、みすぼらしい花壇と可愛げのない女が見られるくらいだ」

嘆息混じりのそんな言葉。

「何だ、やっぱり俺なんかが来ても嬉しくないのか」

少しばかり拗ねたように言つてみると、

「ばか、そんなの 嬉しいに決まってるだろっ」

赤い顔を背けるようにして、逢花はそう言つた。

逢花のそんな素振りは微笑ましくて、思わず笑ってしまいそうだ

った。……むしろ、そうするべきだったのかも知れない。

けれど、聞かなければならなかつた。それが、今日ここに来た理由だつたから。

「花壇……なくなるって、本当か?」

花の世話を始めた小さな背中に、そう尋ねた。

ぴくり、と、僅かに背中が強張つたような気がした。

「……ばれてしまったか。いやさ、知らぬ方がおかしいか。何事に於いてもパツとしないウチの学校にとって、期待の星だからな、今年の野球部は、

どこか諦観したような笑みを含んだ言葉。

「本当なのか」

改めて問うた。部活動どころか、学校生活そのものに興味のない俺にとって、野球部の功績など何の現実感もなかつたから。

「本当も本当さ。もう一週間もしないついで、この場所は更地になる。もう来月の頭には、立派な記念碑が設置されるらしい。夏の大會前に、景気づけと言うかな、背中を押しておきたいんだろうな、

学校も

ははは、と逢花は笑う。そこにどんな感情があるのかなんて分からなかつた。

だから、問うた。問うても、意味のないことなのは分かつていたのに。

「……いいのかよ、それで」

「……どうにも、なるまいよ」

逢花は、小さく嘆息した。

「学校が決めたことだ。私一人が騒いだところで何にもならん」

「一人つて……香月センセとか、他の部員とかもいるだろ」

今更と言えば今更な質問を 何故、してしまつたのか。

「香月先生はしつかり者だが、まだ若いからな。校内での発言権はそう大きくないのだよ。それに……他の部員などいない。園芸部は、私独りだけだ」

その言葉の意味が、すぐには理解できなかつた。

「一人だけ……？」

「そうだ。今時の学生が、わざわざクラブ活動で花を育てたり土いじりをしたりなどするものか。来年、私が卒業した後には、廃部も決まっている。……だから、丁度良いのだよ」

その淡々とした咳きは、余りにも寂しかつた。

だから。

「……納得いかねえよ、俺は」

そんな、ガキみたいなことを呟いていた。

それがおかしかつたのか、逢花はくすりと笑つた。

「お前は我が儘だな、境守。我が儘で……凄く、優しい男だな」

そう呟つきり、逢花は何も言わなかつた。

だから、俺も黙つていた。

「……私はな、境守」

と。やがて根負けしたように口を開いたのは、逢花だった。

「私は……小学校に入学したその日、皆の笑い物になつたのだ。理由は簡単だ。母上が見立てた晴れ着だったからな。それも半端無く気合いが入つていた。笑われて当然だ。

……当然だつたんだ。けどな、私は、それまで母上の趣味がおかしいなどと思ったことはなかつたし……正直に言つてしまえばな、私自身、それを愛していたのだ。……それは、今も変わらない。ずっと、偽つてきた。私が愛するものは、尊いと思うものは、おかしいのだと。異質なモノなのだと。価値観の共有など望むべきものではないのだと」

そこまで言つと、逢花はふいに立ち上がり、俺を正面から見た。
……その瞳が、何かを訴えかけるように潤んでいた。

「お前は、違つた」

背筋を伸ばして、逢花は言った。

「お前は、私を可愛いと言つてくれた。私の夢を、笑わないでくれた。私の小さな花壇を、惜しんでくれた。……だから、もういい。もういいんだ……」

そうして。

まだ言い終わらじもしないうちに、逢花は俺の胸に顔を押しつけた。背中に回された腕は、まるで宝物を抱える子供のように、きつく、きつく、俺の体を、心を、締め付けていた。

「……お前に、私の花壇を見せることができて……良かつた」

ぐぐもつた声が、俺の胸板と彼女の間から漏れる。

俺は、彼女の真意も、自身の心も、何も分からぬまま　ただ、震える小さな身体を抱いていることしかできなかつた。

【ウニ】

『色移りふは花とヒト』

〔 3・1 〕

朝から雨が降っていた。

今日はどうするべきか、少しだけ考えて でも、すぐに出かけ
るのを止めた。

……むしろ、好都合だと思ったのかも知れない。晴れていればどうしても気になってしまつが、雨であれば、顔を出さずとも不自然ではないだろう。

正直、どんな顔をして彼女に会えればいいのか分からなかつた。彼女の吐露した言葉と、俺の体を締め付けた、彼女の腕の感触が今も俺の中をぐるぐると回り続けていたから。

考えなければならないことはあつた。何とかしなければならないことはあつた。けれど、俺に『花壇を見せられて良かつた』と呟いた彼女の優しくも哀しい声が、俺の口々口を千々に乱した。

ろくに考えも纏まらないまま、助けを求めるように 僕は今日も、あのヒトのいる、この場所にいる。

「 どーしたの？ おにーちゃん」

ふいに声をかけられて、はつとした。

見れば、あぐらをかいた俺の上に座つた女兒が、きょとんとした顔で俺を見上げている。

「 あ……ああ、いや、何でもないんだ」

慌てて答えると、女兒は不思議そうな顔をしながらも、

「 そーお？」

そう言つて、再び小さな手に持つた一本の鉤針を動かし始めた。

取り敢えずは、余計な心配をかけずには済んだらしい。だが

「 なーに？ いい若いもんがため息なんかついたらしくて。ため息つ

くと幸せが逃げるつて、知らないの？」

やれやれとため息をつく俺に、そんな声。顔を上げれば、優しい苦笑を浮かべた見知った顔が、俺を見ていた。手には、女兒と同じく、一本の鉤針が握られている。

……ああ、そう言えば、そうだったか。やはり俺はどうかしている。完全に上の空じころか、このヒトの顔を見るまで、自分がいる場所もいる理由も曇だつた。

病院だ。度々折り紙教室が開かれることで、近頃認知度を上げている、小兒科病棟のレクリエーションルーム。絨毯敷きの一角に、俺達三人はいる。

今は、編み物教室の真っ最中だつた。いつもは、主に女兒を中心に行なうかの生徒の姿があるが、今日は一人だけ。他でもなく、今も俺の膝の上で、当たり前のようにくつろぐその子のことだ。

名前は、大岩 遥花おおいわ はるかと言つ。実に優秀な生徒で、齡八つにして師匠をも唸らせる腕前の持ち主である。とは言え、一年以上に渡る長期入院の間、ずっと師匠に付きつきりであつたのだから、それも当然であつたのかも知れないが。

見ての通り、何故か俺はこの子に好かれている。子供に好かれることなど、俺の人生に於いてはまずないと思つていたし、事実、これまでそうであったのだが。しかし、この病院に通うようになつてから、結構ガキ連中とも上手くやつてゐるような気はする。

こうして感じる幼い温もりを、悪くないとも思つていた。

で。その師匠に当たるのが眼の前の彼女 緋蔭優さんであるわけだ。

「何か悩んでるでしょ。おねーさんに言つてみ?」

いつもの調子で、少し戯けたように言つ優さん。

「……いや、何でもねえよ」

俺は首を振つた。

だが、

「たつくんの「つかづかー」」

そんな言葉に一蹴された。

「たつくんが何か悩んでるのなんて、おねーさんお見通しなんだから。まるまるとも言つてやんなさい、「つかづかーって」

そんな悪魔の囁きに、純朴な少女は俺を見上げて、「おにーちゃん、つかづかなの?」

なんて。……そんな綺麗な眼で俺を見ないで欲しい。

優さんは優さんで、

「そーよー、もうほんと、すこしこうづか。ひねくれ者のあまのじやくで、ほんとどーしょーもないんだからこの子ねー」
良からぬことを吹き込んでくれるし。……まあ、間違っちゃないのは自覚してる。

答えに窮して黙つていると、やがて遙花は満面の笑みで言った。

「つかづかー」

「つかづかー」その通りだよちくしょー。

「観念した?」

勝ち誇ったように言つた優さん、「俺は嘆息した。

「……はこはい、観念しましたよ。…………ナビ、話したりしないにかなることじやないと思つぜ?」

俺は言ったが、優さんの笑顔が陰ることはなかった。

「それでも、話してみなくちゃ何も分からいでしょ? 自分ではどうにもならないと思つていても、ヒートに話すこと意外と良い方向に向かうことだってあるんだから」

「……それでもどうにもならなかつたら?」

……質問は、我ながら悲観的だな、と思つた。けれど、それでも

優さんの笑顔は変わらなかつた。

「それでもどうにもならなかつたら、後は、足搔くしかないね。

足搔くだけ足搔けば、例え望んだ形にはならなくとも、何も結果が出せなくとも……きっと最後は、笑顔でいられると思うから」
その言葉の不思議な重みに、俺もまた、自然と笑みをこぼしていった。

……そうして、語った。小さな花壇と、小さな少女と、大きな夢の話を。

【つづく】

『色移ろふは花とヒト』

「 3・2 」

雨は、その日の夕方にはもう上がりっていた。翌日は、前日が嘘のよつや良い天氣で、花壇の手入れをするには持つて来いの陽気だつた。

そんな陽気とは裏腹に、俺の口々口に掛かる雲は未だ晴れではないなかつたが、それでも、会えば何かが分かるだらう……と。優さんは、そう言つた。今一番してはならないのは、彼女を避けることなのだ、と。俺は、彼女の側にいるべきなのだ。今は。

……だから、俺はまた、小さな花壇と小さな少女が待つ、この場所へとやってきた。

だが、今日のその場所は、これまでと少しだけ様子が違つていた。

花壇があり、逢花がいる。それは変わらない。けれど今日は、それ以外に数人の生徒の姿が見えた。

男子生徒が三人。逢花と正面から対峙するよつて立つている。

逢花はと言えば、その三人の前に立ちはだかるように仁王立ちだ。表情は、俺に見せるのとはまるで違う強張つたもので、まるで、眼の前の三人から背後の花壇を守ろうとしているかのように見えた。遠目で状況はよく分からなかつたが、それでも、俺が遠慮する理由はなかつた。むしろ、急いで逢花の元に駆けつけなければならぬいよつや焦燥を感じていた。

焦燥に背を押され、俺は歩みを進める。近づくにつれ、彼らのやり取りが聞こえてきた。

「 からよ、どうせもうすぐ潰すんだろ 」

「それがどうした！　お前達に関係ないだろ！」「

予想通りと言つべきか。逢花の言葉は、会話と呼ぶには余りにも荒々しいものだった。

……？

ふと。不思議な感覚が過ぎる。脳裏を掠めるふとした違和感。

……これは何だ？

だが、四人の口論は、俺の疑問の解決を待つてはくれなかつた。

「関係ねえ？　んなわけねえだろ、俺達や、一応野球部だ」

「そうぞ。ここにや、俺達の輝かしい功績を称える記念碑が建つんだから」

「それとこれとは話が別だ！　工事までにはまだ日がある！　それまでこの場所は、園芸部の　私の管理下だ！　勝手なことは許さない！」

「何が園芸部だ、テメー独りしかいねえくせに、いきがつてんじやねーよ」

「つーか、女のくせに生意氣なんだよテメーは

「もういいわ。オメーが何と言おうが関係ねーし。お前ら、こいつ抑えてろよ。こんなウゼー花壇、俺がぶつ潰してやつからよ」

一人が合図すると、他の一人の男子生徒はニヤリと笑つて、逢花の細い両腕を掴み上げた。

「　っ……！　何をするつ！　放せ！　やめろつ！」

苦痛に喘ぎながら、それでも気丈な言葉を発する逢花。

だがそれを無視して、男子生徒は嫌な笑いを浮かべたまま逢花の花壇に近づいて行く。

俺は。

「　ぐえつ！？」

挽きつぶされた蛙のような声を出して、そいつは地面に転がつた。

他でもない。俺が、後ろからシャツの襟元に手を引っかけて、そのまま引き倒してやつたから。一、二個、ボタンが良い音を立てて弾け飛んだのが見えた。

「なつ……！？」

「て、テメーは……！」

口々に、意外性のない反応を返してくれる。俺はさして何の感情も抱かないまま、逢花の手を掴み上げる一人を暗い眼で見た。

「放せ」

俺の発したその言葉を、奴らは理解できなかつたらしい。だから、繰り返した。

「…………そいつから、その汚え手を放せつて言つてんだ。そいつは、お前らみたいなド汚えクズが軽々しく触れていい女じやねえんだよ」

そこまで言つと、そいつらはようやく人語を理解したのか、怯えたように逢花を解放し、地面に尻餅を突いて咳き込んでいる仲間の元へと後退つた。

俺は敢えて何も言わなかつたが、解放された逢花はすぐに俺の背後に身を隠すと、不安を誤魔化すように俺のシャツを握つた。

「つ……げほつ……さ、境守つ……てめつ……！」

痛む喉を押さえながら、それでも悪態をつく男子生徒。俺はそれを冷たい眼で見据えながら、吐き捨てた。

「何か文句があるのか？」

すると、他の二人は耳打ちするように言つた。

「おい、大会前にやばいって……！」

「それに境守は、あいつはやべーよ……！」

そんな言葉に、尻餅を突く男子生徒も、渋々ながら文句を取り下げた。仲間に支えられながら立ち上がると、

「つ……境守つ！　てめーあんま調子ん乗つてんじゃねーぞつ……！」

そんな捨て台詞を遺して、仲間共々、慌ただしくその場を後にした。

……雑音が消え、俺達の中庭は、いつもの優しい静けさを取り戻す。

逢花は、握った俺のシャツを放すこともなく、そつと額を俺の背に押しつけた。

「すまない境守……助かった……面倒ばかり……かけているな、私は……」

その声が、まるで泣いてるみたいに聞こえたから。

「……何なんだ、あいつらは？」

自らの胸中に湧き起ころる邪な欲求を誤魔化したくて、そんなつまらないことを尋ねていた。

逢花は、疲れたような息をついて言った。

「……野球部の三年生。と言つても、奴らは補欠だがな。……奴らも部活で登校していたのだろうが、……ニアミスしてな。因縁をつけられた。その……昔、ちと揉めたことがあつたのでな、根に持つていたのだろう」

揉めごとの理由など分からなかつたし、問つても意味のないことだと思つた。だから、

「……そうか」

そう言つたきり、俺は口を噤んだ。言つべきことが、見つかならなかつた。

「……境守は」

どれほど沈黙が続いた頃か。やがて、逢花は咳くように言つた。

「境守は、優しくなつたな。……いや、違うか。お前は元々優しい奴だ、それを覆い隠していたトゲが取れたと言つのか 荒々しさが、和らいだ気がする。……前のお前だったら、あの三人は今頃病

院送りだつたる「

そこまで言つと、逢花は少しだけ意地悪く、くくつと笑つた。

けれど、それも長くは続かず、すぐに声の調子を落として続けた。

「……行動だけじゃない。表情も、柔らかくなつた。……希にだが、優しい顔で笑うようになった。そんなお前を遠目にでも見られて、私は嬉しかつた。

……嬉しかつた、けれど。……それ以上に、悔しかつた。できるなら、お前に笑顔を取り戻させる役は……私が、負いたかったのだ。

いや

ふと、俺のシャツを掴む逢花の手に、力が込められたような気がした。

「それは、高望みしすぎと言つものか。ずっと声もかけられずにいた、自分が悪いのだからな……自業自得だ。

……そうだな。私は、もうこれで満足するべきなんだ。今、この瞬間、境守が側にいてくれる。温もりを感じさせてくれる。

……それだけで。私は、もう、満足だ

逢花の言葉の意味が、俺にはよく分からなかつた。ただ、ぽつりぽつりと雨の雫のように呟かれるその言葉は、俺の口の口の中に少しづつ染み込んでいく。まるで、そこに小さな若葉を芽吹かせようとするかのように。

けれど、若葉が芽吹くことはなく、芽吹いたのは、一つの疑問だけ。

彼女は、俺が変わつたと言つた。それは今の俺と、いつの俺を比べてのことなのか。

彼女は、いつから、俺を知つている?

……答えは見つからなかつた。

今は、
まだ。

【へいひ】

『色移ろふは花とヒト』

「 3 - 3 」

入学してまだ間もない頃、俺は当時の最上級生を殴り倒したことがある。白昼に、校内で。公衆の面前で、だ。

と言つても、俺からいきなり襲いかかつたわけじゃない。

……理由は、何であつたか。因縁をつけられたのは間違いない。何か、とんでもなく鬱陶しい理由で絡まれたのだ。とんでもなく鬱陶しくて 許せない理由で。

「 いいづらやつたの、 テメーか？

確か、そんな台詞だつた気がする。

……こいつら?

そうだ。確かあの時、あの男以外に誰かがいた。……三人。三人だ。一つ上の上級生が三人。……三人? その人数には覚えがある気がする。

とどのつまり、報復か。正直顔など覚えていなかつたが、俺が、その三人を殴り倒したことがあつたのだろう。

だが、当時の俺には意味が分からなかつたし、顔にも見覚えがなかつたから、「知らねーよ」つて、そう言つたんだ。

そうしたら、奴はどうしたつけ。

……そうだ、確かにこう言つた。

中庭で、いいづらやつたんだろう?

中庭で。……言われてみれば、覚えがないわけではなかつた。

俺は、ヒトと群れるのが好きではない。集団行動と言う名の一括管理を強いられる学校生活に於いては、できうる限り独りになれる時間、場所を模索して生きている。

あの時も、入学したばかりで勝手の分からない校内を、独りにされる場所を求めて歩き回っていたのだ。

その途上で、その場所に通りかかった。

校舎の壁に囲まれた、小さな中庭。全くないわけではないが、それでも日当たりの少ない暗い場所。人影もほとんどなく、オブジェ的な何かが設置されているわけでもない。物寂しい、忘れられた場所だった。

一見、俺が棲むに相応しくも見えたが、だめだ。無人と言う訳じゃない。それに、これではまだ明るすぎる。草木も生えない場所でなければ、俺には似合わない。

そこに在る僅かな人影を一瞥して、俺は踵を返そうとした。

だが。……何の気まぐれか、俺は足を止めてしまった。

声が、聞こえたから。

荒々しい声のやり取り。明らかな口論だ。こんな静かないい場所で何を。……いや、昔から、馬鹿共が悪さするのは、静かで人気のない場所と相場が決まっているか。

呆れながらも、しかし、俺は立ち去ることができなかつた。理由は　何だつたか。

中庭に足を踏み入れると、程なくして、口論の内容が耳に入つてきた。

だからつ、ボール取るだけだつて言つてんだろーがつ！

不快な声だ。相手と理解し合つ氣など欠片ほども感じさせない、自分本位で身勝手な声。

そんなことを言つて、また私の花壇を踏みつける気なんだろう！

気丈な声が、不快な声を迎える。

そうだ。立ち去れなかつたのは、その気丈な声のせいだ。

はあ？ 何言つてんだこの女、そんなん知らねーし。

嘘をつくな！ 花壇に残つた靴跡を何度も見ているのだ、私は
つ！

口論は続く。俺には、どちらの言い分が正しいのかなんて分からなかつたし、そもそも詳しい事情も分からなかつた。

……だが。その不快な声が、余りにも耳障りだつたから。

気がついた時には、右手に鈍い痺れが走つていた。……ヒトを打倒した時の、胸の悪くなるじんじんとした鈍痛。

何かを問うわけでもなく、誰かを想うわけでもなく、ふいに振るわれた暴力。それに、彼らはどんな感情を抱いたのだろう。大した抵抗も言葉もなく、怯えたように、奴らはその寂しくも優しい場所から立ち去つた。

……何をやつているんだろうな、と自嘲的に思つた。こんなことをしたつて、誰が得するわけでもない。誰かが喜ぶわけでもない無論、俺自身も。

別に、何か思惑があつたわけでもないし、誰かを喜ばせたかつたわけでもないのだ。……だから、そいつの姿も、当時の俺の眼には映つていなかつたのかも知れない。

でも、意識していなかつただけで、そいつは、その時も、そこにいたのだ。

小さな花壇を守る、小さな少女は。

「 そう言つ……」とかよ……」「

悪態をつきながら、俺は寝床から身を起こした。全身が汗でびっしょりと濡れている。

カーテンの隙間から、熱を運ぶ真夏の朝日が差し込んでいた。「つ……一年以上も前のこと……覚えていたわけ……ねえだろが……」

一年以上も前のこと。そんなの、夢でもなければ、思い出すことなんて出来やしなかった。

「 一年以上も」

そう、一年以上も。

「俺の馬鹿げた気まぐれなんて……覚えてんなよ、馬鹿が……」
ほんとに、馬鹿てる。何の得もないことで拳を痛めた俺もそれをいつまでも覚えている、あいつも。
だけど、悪態をつきながらも、俺は自らの顔を覆った両手を外せないでいた。だって、その顔は余りにも無様だったから。鏡を見なぐたつて分かる。けして世間様に晒せない顔をしているのだ、俺は。顔は晒せない。晒せるわけがなかった。

こんな無様な　涙だけは。

【つづく】

『色移りふは花ヒヒ』

〔 3 - 4 〕

俺は……無力だ。金もなければ、社会的な力も、何も持ち得ていない。

何より、ガキだ。自分で自分が嫌になるくらい、俺はガキなんだ。どうにもならないことに喚き散らし、腕を振り回すことしかできない、我が儘で格好悪いただのガキ。

……だから。俺が、誰かにしてやれることなんて何もない。……

そんなこと、嫌と言ひぼどい知らわれている。

それは仕方のことなんだろう。誰も 逢花も、優さんも、俺に何かを求めたりなんかしない。無力な俺を、責めたりはしない。つまりは、そう言つことなのだ。

それは、彼女たちの優しさなのだろう。事実、許されることの安らぎを、俺は感じている。それ以上に耐え難い歯痒さを感じたとしても、それは事実なのだ。

結局の所、俺みたいなガキは、その歯痒い安らぎに身を任せることないのだ。それ以外には何もできないし、無理をすれば、無茶をすれば、空回りして、全てを、大切なモノ全てを、無惨にぶちこわしてしまうだけなのだ。

今は、その子の傍に居てあげて。たづくんが居てあげなきゃ、ダメだよ。

そう言つた、優さんの言葉がよみがえる。

そうなのだ。俺には、それしかできることなどない。彼女を救つてやうだなんて……鳥游がましいことを考えてはだめなのだ。

そもそも、俺が特別やらなきやならないことなんてなかつた。花壇が無くなると言つても、そこにある花までも無くなるわけじゃない。工事が始まる前までに、然るべき場所に植え替えれば良いだけのこと。

幸い、逢花の家はその筋の専門家だ。素人の俺が危惧すべきことなど何もない。

……その、はずだつたんだ。

俺の感じていた不安は、あくまでも子供染みた無力感故のものであつて、何もそんなことを予測していた訳じやない。……けれど、もしかしたら、こんなことが起つたことをこゝへ、俺は危惧していたのか。

俺が、もう幾度目かの訪問をした朝。

そこに、色取り取りに咲き誇る花々の姿はなかつた。

あつたのは、無惨に斃れる花々と、踏み荒らされた花壇の姿。

何があつたのかなんて、考えるまでもなかつた。誰の仕業であるのかだつて。

身体の中の血が全て熱湯になつた様な感覚を覚える。それは、怒り、憎悪、殺意。

けれど、それすらも凌駕するやり切れなさが口口口を締め付ける。傍らに転がつた、手提げ袋を見てしまつたから。ここ数日で、すっかり見慣れたものだ。いつも、彼女はこれを片手に通つていたのだ大切な花たちのために。

この惨状を目の当たりにして、彼女はどんな感情を抱いたのか。

……そんなもの、俺如きには分からぬ。分かるなどと、軽々しく言つてはならない。

それでも、胸をきつへ締め付ける、じす黒い吐き気のよひなものを感じていた。吐き出すことのできない黒い固まりが、胸の奥にしがんでいた。

いいや。吐き出すことは、できる。彼女には無理でも、俺にはできる。せひとと、多分、それは俺にしかできないこと。俺が唯一できること。……こつかと同じ答へ。

だが、俺の足は動かない。すぐにでも駆け出してしまううなほど、全身の血は煮えたぎつてこむところ。汗の流れやへ『えられた役田だといふの』。

俺が今、すべきこととは何か？　できることとは何か？

自問して、自問して。

俺は、彼女の手提げ袋を拾い上げる。

軽く埃を払つてやつて……俺は、花壇に背を向けた。

向かう先に怒りはない。憎悪も、殺意もない。

今は、そのままの子の傍に居てあげて。たいくみが居てあげなきゃ、ダメだよ。

胸に湧くのは、ただ、その言葉。

【へび】

『色いろふは花とヒト』

「 4・1 」

母親つてのは、ことと子供のことに関して、時々、変な能力を發揮することがある。

それは逢花の母も然りで、彼女は突然現れた俺にも動じることはなかつた。まるで全てを承知していたかのように優しく笑つて、俺を招き入れてくれた。

そんな母の優しさに、ある種の安らぎを感じたが 同時に、それだけでもう、逢花の奴がどんな様子で帰宅したのかが容易に想像できた。

果たして、初めにどんな言葉をかけるべきなのか。

……そんなことも分からぬまま、俺は、逢花の部屋の前に立つていた。

「……逢花？ 僕 境守、だけど……」

控えめにノックをして、恐る恐る声をかけた。

返事はない。だが、微かに身じろぎするような気配だけは感じられた。

「……すまん、入るぞ」

迷いがなかつたわけではないが、ただ突つ立っている訳にもいかず、俺は扉に手をかける。拒絶の声はなかつた。

そこは、一見、女性らしさを全て排除したかのような簡素な部屋だつた。けれど、良く眼を凝らして見れば、そこかしこに、まるで人目を避けるかのように可愛らしい調度が隠れている。

それは、彼女の精神世界そのものだった。

何よりも愛しいと想うモノがありながら、されど、けしてそれで

世界を埋めることのできない矛盾。不条理な抑圧と無限の孤独に苛まれる、悲しみの場所。

……その中心で、震える小さな背中が蹲っていた。

「……逢花」

名を呼んでみたが、相変わらず返事はなかつた。

俺はしばし思案して けど、すぐに嘆息した。うじうじ悩むなんざ俺らしくねえ。答えねえなら、てめー勝手に喋つてやらあ。

「ほらよ、落としモンだぜ。つたく、こんなデカくて田立つモン、落としていくなよな」

言つて、逢花の傍らにそつと手提げ袋を置いた。

と、逢花はけりりとそれを見やつて、言つた。

「……そうか。わざわざ、こんな物を届けるために、すまなかつたな」

静かな声だった。敢えて感情を押し殺しているような声。

そこに、どんな想いが込められていたのかなんて、俺には分からなかつた。

だから、敢えて戯けるように言つた。

「まさか。俺だって、そこまで物好きじゃねえぞ」

逢花の背中が、少しだけ怪訝そうに揺れた。

「……じゃあ、何のために?」

そう問うた逢花に、俺は苦笑混じりに言つた。

「……ガキが、泣いてると思ったからさ。俺も最近気づいたんだけどな。どうやら俺は、ガキが泣いてるのを見ると、無理矢理にでも黙らせてやらないと気が済まないタチらしい」

そんな言葉に、逢花は僅かにくすりと笑つて、

「誰がガキか……失礼な奴だ」

そう、穏やかな声で言つた。

しかし、その穏やかな声とは裏腹に、逢花は口ひらに顔を向けようとはしなかつた。

「……心配は無用だ。この通り、私は泣いてなどいない。少々ショックだったのは確かだが、これしきのこと、耐えられぬほど弱くはないわ」

そんなことを言つ。強がりなのは、顔を見なくたつて分かつた。

「あんな。そんな強い奴が、お気に入りの手提げ袋落としたまんま、部屋で独り膝抱えてたりするかよ」

「大丈夫だと言つている」

嘆息混じりの俺の言葉に、逢花は声を固くして言つた。

「……言つただろう。私はもう、満足なんだ。お前に花壇を見せてやることができた時点で、私とお前の関係は終わっている。それで終わりなんだ。……それ以上、何を望めと言つのか」

そんな口簡潔の弦きにて、俺は半ば苛立ちを覚えて、逢花の肩に手をやつた。

「ひ……！？ やめやめ……！」

拒絶の声。けれど、俺はもう止まらない。

「はあ？ 何言つてんだ、ヒトと話す時や、相手の顔見るモンだろが。いいからつ……こつち向けてのつー！」

強引に、その華奢な肩を引き寄せた。

「ひああつ……！？」

言葉にならない悲鳴。同時に、その軽い身体はいとも容易く地の戒めから解き放たれて、そのまま俺の胸元へと倒れ込んだ。ぱすつ、と言つ軽い音がして　俺を見上げる形になつた彼女と、眼があつた。

驚きで、まん丸に見開かれた大きな瞳。けれど、大きさよりも印象深かつたのは、それが酷く濡れていたこと。そして、誤魔化しよのない、頬に描かれた軌跡。

「……ほれ見る。やっぱ泣いてんじゃねーか

先ほどまでの強がりを思い出して、思わず苦笑してしまった。

そんな俺の顔を見て、逢花がどう思つたのかなんて分からない。

分かつたのは、彼女の強がりもそこまでだつたと言つこと。

「つ……境守いつ……！」

言ひや、逢花は瞬間、身体の向きを変えて、そのまま俺の首根っこにしがみついた。

ふいなことに、俺はバランスを崩して背中から倒れ込む。だが、そんなことにもお構いなしに、逢花は俺に覆い被さつたま

ま、

「境守つ、境守つ、さかがみいつ……！」

そう、悲痛な声で俺の名を呼び続けた。まるで、幼少から今まで、ずっと我慢してきたモノ全てを吐き出すかのように。

俺は、そんな少女の叫びを、ただじつと聞いていた。言つべきことなど見つからなかつたし 何より、今はそうしてやることを、彼女も望んでいるような気がしたから。

【へびく】

『色移ろは花とヒト』

「4・2」

泣いてる女ってな、見ていて気分のいいもんじゃない。それが肉親や、それに近しい相手だつたりすると、それこそ堪つたもんじゃねえ。その上、原因が自分にあつたりした日には 考えたくもないな。

……まあ、そのいずれでなくとも、嫌なもんは嫌なんだが。女の涙つてのは、さ。

無遠慮に俺の胸に乗つかつたそいつが泣き止むのに、どれだけの時間が掛かつたのか、正確な時間は分からぬ。ただ、俺の胸にして小さくはない染みが出来るのには十分な時間だつた。

「……落ち着いたかよ？」

嗚咽が聞こえなくなつたのを確認して、俺は嘆息混じりに問うた。逢花は恥ずかしいのか、声は出さず、僅かに身じろぎしただけだつた。

「……この状態じゃ、頷いたつて分かんねーよ？」

分かつていながら、意地悪く言つ俺。

「……分かつてるくせに、そーゆーことゆうな

逢花は拗ねたよう言つて、けれど、やはり俺の胸から身を起こしそうとはしなかつた。

潔く諦めて、俺は嘆息した。

そうして、改める。

「……なあ逢花。一つ、聞いていいか？」

「？……何だ、改まつて」

胸の上の小さな重みが、怪訝そうに軽く揺れた。

拒絶の意図はないと理解して、俺は続けた。

「何で俺なんかに、あの花壇を見せようと思つた？」

逢花は少しだけ迷ったように沈黙して、

「……お前に見せたかったから。それでは理由にならないか？」

「そんな風に囁いた。

そうか。逢花はまだ、俺が「忘れたまま」だと思っているのか。

「……聞き方が悪かった」

俺はじっと天井を見つめたまま、改めて告げた。

「花壇を見せるだけなら、今まで幾らでも時間はあつたろ。こんな切羽詰まつた時期でなくとも、それこそ、丸一年。……お前と俺が出会つてからの、一年」

「……覚えていたのか」

喜んでいるのか、困っているのか、分からぬよう複雑そうな声だった。……あるいは、思い出してほしくなどなかつたのか。

「……今だからこそ、さ」

僅かに黙してから、逢花は観念したよつて告げた。

「こんな切羽詰まつた時期だからこそ、私は動くことが出来た。それも、香月先生の助けを借りて、やつとな。そうでなければ……情けない意気地なしの私は、お前の前に立つことすら出来なかつた」
……ヒトに否定されることを恐れ、自らを偽り続けた少女。それを、ふと思い出した。

「……

かける言葉が見つからない。

けれど、俺の言葉など無用とばかり、逢花は明るい声で続けた。

「それに、これくらいの時間が必要でもあったのさ。私の花壇を、

ちゃんをお前に見せるためには

……お前が守ってくれたものを、

正しくお前に伝えるためには

俺が守つたもの。……その優くも、尊い姿が脳裏に浮かぶ。

胸の中の小さな温もりを、何より尊く思つ。

しかし、だからこそ、いつまでもその尊さに酔いしれているわけにもいかない。

「……逢花」

華奢な肩を掴み、身を起こすように促す。

彼女は嫌がるよう身を固くした。

「……やはり、私ではダメか……？」

子供のようにおびえた声。

「そうじや、ないけどな」

口を衝いて出たその言葉が、どれだけ本気だったのかは分からない。ただ確かなのは、彼女を拒絶する気持ちなどは、欠片ほどもなかつたと言つこと。

それでも離れるように促したのは

「……さつきから、ドアの外でヒトの気配がするんだよな

まあ、そう言つことだ。」

途端、逢花は弾かれたように俺の胸から身を起こすと、真っ赤な顔で、怒った小動物のようにドアへと向かった。

やがて聞こえてくる、母子の声。取り繕うことなく、感情のままに言葉をぶつけ合える家族。それは、幸福の象徴だ。そんな光景を背に、俺はやれやれと息をついた。

ひとまず、俺が今ここでやることはやつた。一時とはいえ、この愛すべき親子に笑顔を取り戻すことは出来たのだ。
けれど、これで終わりじゃない。俺がやるべきこととはもっと別にある。途中で投げ出したりしてはだめなんだ。

だつてそうだろ？俺は一度、守らつとしちまつた。男が一度守
らつと決めたのなら、最後まで守り通さなきゃ嘘だ。

俺は、俺の大切なもんを守る。もう間違わない。

あのヒトも、それを望んでいる気がするから。

【つづく】

『色移りふは花とい』

〔4・3〕

新しい花壇が用意されなかつたのは、すでに園芸部の廃部が決まつていたからに他ならない。予期せぬ野球部の活躍で頭の沸いていたうちの校長でなくとも、来期から面倒を見る者が存在しない花壇をわざわざ新たに作つたりはしなかつたろう。

だから、それはもう仕方のないことだ。場所があろうとなかろうと、学校には『園芸部の花壇』が作られることはないし、作ることも出来ない。

だから　俺には、そこへくらいしか当てがなかつたわけで。

「と、言つたわけだ、どうしたらい？」

「何が『どうしたらい？』なのか全く分からぬいけど、何となく分かつたよ」

突然切り出した俺に、優さんは揺らがぬ笑みのまま言つた。……

マジでか。言った俺の方が驚きである。

「……あたしには何が何だか分からぬいんですけど」と、俺の背後で渋い顔をするのは、ひなたである。一いちらの反応の方がもつともだ。特にこいつは、事情も話さず無理矢理ここまで引っ張ってきたのだから、機嫌が悪くて当然だった。

病院である。加えて言えば、他でもない優さんの病室である。

俺の『当て』とは、つまり、この場所だった。

「つて、ほんとに分かつたのかよ？」

念のため問い合わせると、優さんはこくりと頷いた。

「花壇のことでしょう？　たっくんがこんなに真剣な顔をすること

なんて、今はそれしかないもんね

何だか見透かされたようで恥ずかしかつたが、今はそれが有り難かつた。

しかし、単に意志が通じることと、答えを貰つ「」とはまた別である。

「……具体的に、誰に頭を下げれば許可が貰える?」

俺の発言に、背後で愕然としたような大仰な気配を感じたが、まあ、無理もない。こんな言葉を吐くなんざ、俺自身が一番信じられないんだから。

優さんは優さんで、何が楽しいのだが、ニーニー笑つている。

「……大丈夫だよ」

優しい声で、優さんは言つた。

「ちょっと待つてね」

そうして、おもむろに傍らのナースコールを手に取つた。間もなく、天井のスピーカーからナースの声が聞こえてくる。

『はい、どうされました?』

「草壁さん呼んで下さーいっ」

と。……いきなりナースコールで指名を入れる患者など初めて見たわけだが。

更に言えば

『……はい』

「すぐ来てー」

臆面もなくそんなことを言つてのける奴も初めてだったのだが。

だが、その『草壁サン』とやらは次の瞬間、何も言わずに通話を切つた。……姿は見えないのに怒氣を感じたのは氣のせいだろうか。結論から言えば、氣のせいではなかった。

「だからー！ ナースコールを使ってヒト呼び出すのやめな

んだ。草壁サンとやらは次に

「ここって言つてゐるでしょーがつ！　あたし達はあんたと違つて忙しいのよつつ！」

そんな怒声とともに、そのナースは病室に飛び込んできた。この病室が個室であるとは言え、随分とけつたいな看護婦さんである。

一方の優さんはと言えば、

「いやーん、怒つちやーよー、さつちやんばー」

なんて。

見たところ、二人の年はそつ変わらなによつて見える。と言つか、そのやり取りを見るに、年も近ければ、関係も単なるナースと患者のそれではなさそうだった。

「さつちやん言つなつ！　まつたく、あんたつて子はつ！　あんまりヒトに迷惑かけるようなら、病院追い出すわよー！　てか、いい加減考え方直して出て行きなさい！」

どうやら、かなりお冠のようである。無理もないが。

しかし分からるのは、何故、優さんが彼女をこの場に呼んだのか、だ。

疑問が顔に出ていたのか、優さんは軽く苦笑して、改めた。

「『めんね、さつちやん。その話はまた今度　今はそれよりも、ね？』

促されて、草壁サンは俺の方を見た。

そうして、ふいに合点がいったように笑つた。優さんによく似た、無意識にヒトを元気にさせる、明るい笑顔だった。

「キミが境守クンね、優から聞いてるわ。あたしは草壁 幸子。^{くわいがく} よろしくね」

「はあ……」

状況が飲み込めず、気の抜けた返事しか出でこなかつた。

だが、次の彼女の言葉で、全てを理解した。

「花壇の件だけど、院長と婦長に話は通しておいたわ。中庭の一角を使つてもいいことになつたから。がんばつて？」

言つて、軽くウインクなどして見せる。

そうか。全ては、優さんがお膳立てしたことなのだ。

俺は。

「……あ あつ、ありがとうございます……」「無意識に、頭を下げていた。草壁さんと 優さんに。……まつたくもつて、俺らしくもないが、ひなたは言わずもがな、さすがに優さんも、少しだけ驚いたようだった。

ともかくも、これで最大の問題は解決した。あと必要なことは、あいつのお袋さんに頼んで必要な物を揃えることと……器具類は、学校から失敬してくれればいいか。ことがことだ、香月センセも協力してくれるだろう。

となると、あとは

「……なあ、ひなた」

少し考えてから、俺は背後の幼なじみを振り返つた。
状況の飲み込めていないひなたは、眼を丸くしている。

意を決して、俺は告げた。

「俺は……馬鹿だし、ヒトを傷つけるしか能のない、そんな奴だから……その、や。お前が……手伝つて、くれないか。めんどくせえことに巻き込んで悪いけど……俺一人じゃ、ろくなことできねえつて身にしみてるから……ひなた。俺を、助けてくれ」

正直、迷いながら必死に紡いだ言葉。歯切れも悪く、何が言いたいのかもよく分からなかつたかも知れない。

けれど、ひなたはそんな格好悪い俺を笑いもせずに、ただ一度、こくりと頷いてくれた。

“じいが嬉しそうに、笑いながら。

【ハハ】

『色移りふは花といへ』

「 4・4 」

おそらく、勘違いさせてしまっているだらうことは薄々分かつていた。

本当の自分をさらけ出すことを極度に恐れる彼女が、精一杯の勇気で着飾つたであろうその衣装。自らが最も愛らしさと思つその装飾。

それが誰のためにあつたのか、分からぬほど俺は鈍くない。鈍くない……つもりだ。

けれど、いざ連れ出されたその場所は、きっと彼女が期待していたようなところではなかつたろう。

変な期待をさせてしまつたのは俺の責任かも知れない。だけど、内緒にしておきたかったのだ。内緒にしておいたほうが面白い、と誰かが言つたから。変に誤解を解こうとするば、ボロを出してしまひそうで怖かつた。

……いや、それも言い訳か。どんな責め苦も後で甘んじて受けよう。

だけど、今は。

「……何だ、これは

最初の言葉は、そんなもの。彼女 逢花は、その場所をじっと見つめたまま、微動だしなかつた。

彼女の眼の前、すぐ眼下には、煉瓦で囲つただけの粗末な花壇があつた。

俺達の作った、花壇。

「花壇に見えね？ いまいち見栄えはよくねーけどさ」「そういうことを言つてるんじゃないつ

軽く戯けてみた俺に、逢花は微かに声を荒げた。

「……何でこんなところに、私を連れてきた

「こんなところ、とは、即ち病院である。もちろん、優さんや遙花は現在進行形で入院中であるし、ついでに言えば、ひなたも交えた三人で、今も少し離れたところでの成り行きを見守つてこる。

「……俺には、こんなところしか思いつかなかつたんだ」

逢花の小さな背中が震えてるような気がして、俺は戯けるのをやめた。

「消毒液臭いところは……嫌だつたかな」

少し前の自分を思い出しての、その言葉。

だけど、その言葉はどうやら的外れだつたらしい。

逢花はふいにぐるりと振り返ると、怒つたよつに顔を真一文字に結んだまま、俺の横を通り過ぎた。

「おっ、おい逢花っ……！」

慌てて振り返り、呼び止める。

逢花はさして逆らわず足を止めた。

「……わざわざこんな格好をして……馬鹿みたいではないか、私は」

そう、低い声音で漏らす。

……まあ、当然か。危惧していた通りの展開。

勿論、当然なのは、俺が責められることも含めて。ひっぱたかれても仕方ない。女に恥をかかせたのだ、どんな責め苦も受け入れる覚悟は疾うにしている。そう言つたろう？

だけど、背を向けられてしまつただけは困るのだ。

「誤解させちまつたのは悪かった、それは謝る。なんなら思い切りひっぱたいてくれてもいい。けど、俺もあるまじや治まりがつかない

かつたつづーか……いや、俺の単なる我が乍つていやそなんだが

「…………」「

何とか逢花を引き留めようとする俺。だが、逢花は何も応えない。諦めず、俺は続けた。

「その、お前の気持ちも分かる。けど あの花壇、俺独りで作つたわけじゃねえんだ。色んなヒトに迷惑かけて、色んなヒトに助けて貰つて……それにト達の気持ちが、土ん中に入つてる。……ような気がする。

……あー、何か上手く言えねえけど あの花壇にだけは、背中向けてほしくないんだ。俺のことはひっぱたいてくれていい。罵つてくれていい。女心の分からぬサイテー野郎だつづつしてくれて構わねえよ。

……一度と顔見せんなつてなんら、そつする。だから

「境守」

みつともなく、べらべらと独り続ける俺を、ふいな逢花の声が遮つた。

「眼を閉じて歯を食いしばれ」

一も二もなく、その言葉に俺は従つた。拒む権利などあるはずもない。

そうして、待つた。強烈な一撃がお見舞いされるのを。血へド吐いて歯が5、6本吹っ飛ぶ画まで想像していた。……小柄な女相手にする想像では無かつたかも知れないが。

……しかし、俺の頬を打つたのは、そんな憎しみの籠もつた一撃ではなかつた。

ペチ。音にすればそんな感じ。両頬を挟まれるよつに、軽い衝撃。眼を開けてみれば、俺の頬に両手を伸ばしながら、こちらをじつと見上げる逢花の顔があつた。怒つているのか、悲しんでいるのか

……よく分からぬ表情だつた。

「逢花……？」

戸惑う俺に、逢花は僅かばかり瞳を潤ませて言った。

「お前は、馬鹿だ。……私は、もう、諦めるつもりだつたのだぞ。今日、お前と『テート』して、一日せいいつぱい楽しんで、それで……もひ。なのにこんなことをされては……諦め、きれない。忘れられない……では、ないかつ……」

「おつ……か……？」

ふいなことに言葉の意味を計り兼ねた。間抜けに名を呼ぶことしかできない。

そんな俺に、逢花は

「境守の……境守の……ばかっ！」

言つや、またもくると俺に背を向けて、しかし今度は、先ほどとは違い脱兎の如く全速力で駆け出した。

「ちょつ、おまつ　おいつ、逢花っ！？」

慌てて声を上げると、逢花は少し離れた場所で振り返った。

「分かつてる！　お前の　お前と私の花壇に背を向けるつもりはない！　しかし、そのままではあまりにも寂しいだろ？…　家から幾らか見繕つてくる！」

確かに、俺が　俺達が用意したのは、言つなれば入れ物だけだ。逢花の言つことももつともではある。……まあ、実際は、学校から拾つてきたシロツメクサが一輪、申し訳程度に植わっていたりはあるのだが。

「それに、土いじりをする格好ではないのでな！　ついでに着替えてくる！　お前はここで、大人しく待つていろ！　いいか、独りでいなくなつたりするのではないぞ！　責任は、しつかり取つて貰うからなつ！」

びし！ つと指を突きつけて言つと、逢花は再び背を向け ようとして、ふいにまた俺を見た。

きよとんとする俺に、逢花は

「境守の……ばーかっ」

そう言つて、今度こそ、まっすぐに駆けだした。最後に見た顔には、真夏のひまわりも真つ青の、満開の笑みが広がっていた。

随分と、俺らしくないことをしてしまったと思う。

街の馬鹿共から、泣く子も黙る境守起陽と恐れられるこのオレサマが、何と言う体たらしく。『泣く子も笑う境守起陽』では、カッコがつかねえもいいことだ。

後になつてそつぼやいたら、今回のきっかけを俺に『えたあのヒトは言つた。

花もヒトも、時と共に色を変えていくものだから。

自分が今、どんな色になつているのかなんて分からなかつたし、この先どんな色になつていくのかなんて、それこそ見当もつかねえけど、まあ。出来れば少しきらりとは見られる色になつてくれればな、なんて思う。

……ほんと、俺らしくもなかつたけど。

色は、時と共に移ろい行く。

それは不確かで、予測不能で、不安ばかりのものだ。

けれど今は、その変化に身を任せてもいい。……身を任せていたい、とい。

心のどこかで、俺はそう思っていた。

【朱色】優陽 2 『色いろいはな花とヒト』 終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7102m/>

『朱色優陽 アケイロユウヒ』2

2010年10月8日12時40分発行